

摂食障害患者の養育環境に関する実証的研究

著者	山口 直美
内容記述	筑波大学博士（医学）学位論文・平成13年9月30日 授与（乙第1765号） 付：参考文献
発行年	2001
URL	http://hdl.handle.net/2241/1231

氏 名 (本 籍)	やま ぐち なお み 山 口 直 美 (神奈川県)
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 1765 号
学位授与年月日	平成 13 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	医学研究科
学 位 論 文 題 目	摂食障害患者の養育環境に関する実証的研究 － Parental Bonding Instrument (PBI) を用いて－
主 査	筑波大学教授 医学博士 庄 司 進 一
副 査	筑波大学教授 医学博士 大 塚 盛 男
副 査	筑波大学教授 医学博士 松 井 陽
副 査	筑波大学助教授 医学博士 奥 田 諭 吉

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

摂食障害の発症の背景の 1 つである養育環境を Parental Bonding Instrument (PBI) を用いて評価し、摂食障害の各症状の形成に係る養育環境、入院治療転帰に係る養育環境、摂食障害の自殺の危険因子としての養育環境、等を検討する。

(対象と方法)

- 研究 1 摂食障害入院患者 52 名および正常対照群 107 名に PBI を施行し、病型間、症状の程度、自覚症状の程度、等で PBI 得点を比較、相関を検討した。
- 研究 2 摂食障害入院患者 40 名に Global Clinical Score (GCS) を用いて入院中の臨床症状の改善度から転帰良好群と不良群に分け、摂食障害の重症度、家族関係の問題の有無、PBI 得点、等で比較検討した。
- 研究 3 摂食障害入院患者 51 名を自殺企図の有無で分け、摂食障害の重症度、人格特徴、家族関係の問題の有無、等で比較検討した。

(結果)

- 研究 1 過食や排出行動を伴う病型群では両親の Care 得点は有意に低く、その低さの程度は過食や嘔吐の重症度と有意な正の相関が認められた。拒食や Overprotection 得点に関しては、相関が認められなかった。
- 研究 2 入院治療の転記不良群では母親の Care 得点が有意に低かったが、Overprotection 得点、年齢、罹病期間、重症度、家族関係の問題、等と治療転帰とは関連を認めなかった。
- 研究 3 自殺企図群では両親の Overprotection 得点が有意に高く、虐待体験が有意に多かった。自殺企図群では、感情の不安定性、不安定な自己像、見捨てられることの回避、適応的でない完全主義、等の特徴が有意に多く、人格障害や気分障害が有意に多かった。一方臨床症状や重症度は自殺企図との関連を認めなかった。

(考察)

両親の愛情不足の養育環境が、過食や嘔吐などの症状の発症に関与している可能性が示唆された。母親の愛情不足で不適応状態を起こし、父親の愛情不足で自尊心が低く自立困難となると考えられる。患者は不安や孤独を慰めるために過食をしたり、社会の求めに影響を強く受け瘦身願望を持つと考えられる。

母親の愛情不足の養育環境が入院治療の転帰不良因子であった。母親の愛情不足で不安定なアタッチメントが形成され、治療関係を結ぶことが困難になると考えられる。

自殺の危険因子として、両親の支配的で過保護な養育環境が重要であった。両親の過保護な養育態度は、患者の分離・個体化における自立の戦いを激化させ、自殺企図を生じさせやすいと推察される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

近年増加している摂食障害の中でも過食や嘔吐を伴う病型で両親の愛情不足が発症に関与し、摂食障害患者の自殺の危険性は両親の支配的で過保護な養育態度が関係する、摂食障害患者の入院治療の不良転帰は母親の愛情不足が関係する、等を初めて実証的に証明した研究で、摂食障害の臨床に大きく貢献するものである。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。